



亀山市名誉市民

彫刻家 中村 晋也

Shinya Nakamura

作品紹介

ふるさとあい

vol.124

「ミゼレーレXIII」

平成10(1998)年

今年の夏は災害が続きました。気温が40度を超える日に「酷暑日」という気象用語が加わり、温暖化による豪雨災害や地震が世界中で発生して、多くの方が被災しました。

《ミゼレーレXIII》の膝の上に乗っているのは瀕死の山羊です。「なぜ山羊なのですか?」と中村に尋ねると、「戦後、栄養不足で乳が出ない母親は、山羊の乳で子供を育てた。だから山羊は母親だよ」と。

いよいよ力尽きてしまった山羊は、被災された方々の疲弊した姿を彷彿とさせます。亡くなった方々への追悼と復興への願いが込められた作品です。



(高さ)126cm × (幅)53cm × (奥行)68cm
中村晋也美術館

特別協力

公益財団法人 中村晋也美術館

<https://www.ne.jp/asahi/musee/nakamura/>



まちかど

キラリ

中石 和希さん (関町会下)



県立神戸高等学校1年。放送部副部長。第73回NHK杯全国高校放送コンテスト・テレビドキュメント部門では、三重県代表4校の1校として出場し、昨年度から受け継いだ作品「線の向こう側」で、チームの一員としてナレーションを担当。全国大会では準決勝に進出し、仲間と積み重ねた努力が実を結んだ。中学時代は美術部に所属。

声で表現することが、僕を育ててくれる

中学時代、文化祭のステージで一人マイクを握り、観客の視線を浴びながら「ウルトラソウル」を熱唱し、会場を盛り上げた中石さん。「とにかく注目されることが好きだった」と話します。高校では、先輩の温かい雰囲気や全国大会出場の実績にひかれて放送部へ入部。声で表現することへの興味からアナウンスを選びました。その選択は、作品の世界観を声で描くナレーションにも挑むきっかけとなりました。

県大会に向けて最も苦労したのは、声の表現の幅を広げること。制作した作品が「交通事故対策」を扱う内容だったため、「感情を抑え、冷静さを保った声」を作るのに悩んだと振り返ります。それでも、家でドキュメント番組の語りを研究したり、自分の声を録音して聞き返したりするなど、地道な努力を積み重ねました。

三重県予選では、個人アナウンス部門で決勝進出。惜しくも全国大会出場は逃

しましたが、テレビドキュメント部門では、チームとして県2位となり全国の舞台へ。作品「線(ライン)の向こう側」ではナレーションを担当し、全国大会では予選を突破して準決勝まで進み、チームは制作奨励賞を受賞しました。

「全国大会を経験して、自分の話し方が変わったと感じます。人前に立つ緊張も減り、できることが増えている実感があります」と話す中石さん。放送部としての全国での最高成績は準決勝進出。「それを超えて優勝し、放送部をもっと盛り上げたい」と目を輝かせます。その声は、これからもますます、多くの人の心へ届いていきます。



作品「線の向こう側」は、市公式YouTubeでご覧いただけます。12月31日まで視聴可能。

